地域教養＊四方山話

天野　雅郎

四方山話【よもやまばなし】
種々雑多な話。世間話。雑談。よもの話。よもやまの話。
絅斎先生敬斎箴講義（17C末－18C初）「小刀細工して、四方山話すると手を截（きる）」（『日本国語大辞典』）

1

最初に、あえて個人的な話から筆を起こす。何を隠そう、かつて大学生と大学院生と、それから助手であった頃、と書き出して、たまたま先日、授業で中谷宇吉郎（なかやうきちろう）の『科学以前の心』（河出書房新社、2013年）と題された文庫本を読んでいた所、そこに登場する「助手」という語が昨今の大学では、どうやら死語に等しい扱いを受けているらしいことに気づき、いささか驚いたので付け加えておくけれども、この「助手」という語は現在のような形で、平成19（2007）年以降に「助教」という職階（＝職務階級）が日本の大学に姿を見せる以前の、古い呼び名であって、もともと「助手」という語で呼ばれていたのは、この国の高等教育機関における教育（education）と、それと並んで研究（research）との、両面に亘る補佐役（assistant）のことであり、それが今から13年前に、目下の「助教」と「助手」に細分化され、より歪んだ階級構造を呈するに至っているのが順序である。

とは言っても、このような日本の高等教育機関における職階（job classification）は、さらに遡れば、この国の「大学」の成り立ちとも、その軌を一にしていた訳であり、したがって、それは当面、どうにか140年の命脈を保っている、西洋起源の大学（ユニヴァーシティー）に限られた話では、さらさら無い。論より証拠、試しに手許の『日本国語大辞典』（小学館、2006年）で「助教」を引くと、そこには日本の古代の律令制に基づき、大宝元（701）年に設置された「大学寮で、博士を助けて授業や課試〔＝課題試験〕にあたった官人で、明経科にのみ置かれていた。定員二名で、正七位下相当。すけはかせ」とあって、その典拠には天長10（833）年の『令義解』が挙げられているから、この語が何と、すでに日本の古代には定着済みの語であることが分かるし、その歴史を踏まえて言えば、はるかに「助教」の方が「助手」よりも、その由緒は正しい語であったことにもなる。

それに比べれば、もう一方の「助手」が遡っても、これまた『日本国語大辞典』に従うと、せいぜい大正10（1921）年の『暗夜行路』（志賀直哉）とか、あるいは、その翌年の『星座』（有島武郎）とか、このような白樺派の小説あたりが上限であるのなら、そこから数えても、たかだか百年を指折る程度である。ちなみに、この語の初出に『日本国語大辞典』は明治14（1881）年に西周が訳し、彼が「御用掛」を務めていた「参謀本部」の名で公刊された『五国対照兵語字書』（Dictionnaire Polyglotte）を宛がっているから、この語が古くは「鉄道で、助士〔＝機関助士〕の旧称」であった点や、なおかつ「タクシーなどで、運転見習いを兼ねて運転席の隣に乗っていた人」を指し示していた点も含めて、けっこう私たちのイメージする「助手」の姿とは、違う面を兼ね備えていたことも確かであるし、それが存外、この語の隠された、本来のルーツを偲ばせる面もあって興味深い。

ともあれ、そのような「助手」という語が昭和22（1947）年になって、現在の「新制大学」（new-system university）がスタートを切る際、この国の「学校教育法」（school education law）の中に持ち込まれ、そこから時を経て、ちょうど還暦（60歳）を迎えた折、言ってみれば、この語は定年退職の憂き目に遭い、お役御免を蒙ったことになるであろう。そして、それに代わって昨今の大学では、例えば教授が「専攻分野について、教育上、研究上又は実務上の特に優れた知識、能力及び実績を有する者であって、学生を教授し、その研究を指導し、又は研究に従事する」と規定されているのに対して、そこから順に、この文言の中の「特に」と、それに続いて「優れた」を除き去ると、それは忽ち、准教授や講師や、あるいは「助教」の規定と、まったく同一の文面になってしまい、そのことを通じて昨今の大学の、きわめて民主的（democratic）な姿が証し立てられている。

もちろん、それが大学であれ何であれ、ひろく教育の場が民主的になり、そこに縦の繋がりよりも、むしろ横の繋がりが際立つのは、いたって結構なことであるし、この上なく結構なことでもあるに違いなく、このような「学校教育法」の60年ぶりの改正も、それは端的に、それ以前の大学の封建的な、あまりに封建的な旧制度を打破することに、その主眼が置かれていたことは疑いがない。が、それにも拘らず、その代償（quid pro quo）として、結果的に昨今の大学では皮肉にも、それまでの「助」教授にせよ「助」手にせよ、このような「助」を冠した語によって担われていた、お互いの助け合い、と言い出すと、いかにも歯の浮いた、綺麗事の感は拭い切れないが、それでも確実に、何時の頃までの大学であ

ろうか、そこに宿っていた相互扶助の精神や、いわゆる「お互い様」の心まで、綺麗さっぱりと脱落させることになってしまったのであるから、これは侘しい話である。

しかも、それと同時に昨今の大学から、おそらく姿を隠したり、消したりしたものの一つが、実は本稿の主題ともなっている「教養」であったらしいから、これは驚き以外の何物でもないが、いささか懐古的に振り返れば、もともと「教養」とは大学（university）という教育の場に、それぞれ講座や教室と称される、幾つもの小さな、宇宙（universe）が点在し、そこに先刻、名前を挙げた中谷宇吉郎や、あるいは、その恩師である寺田寅彦（てらだとらひこ）のような、それぞれ教授が恒星として光を放ち、その周囲を、さらに助教授や講師や、ひいては「助手」という惑星や衛星が取り巻いている、はなはだ牧歌的な、その名の通りの秩序世界（cosmos）を前提とするものではなかったであろうか。それならば、そのような人間関係をこそ求めて、まさしく「助手」（アシスタント）は好んで、その原義である「傍に立つ」（assist→assistere）行為を、みずから選び、引き受ける側なのであったろうが。

2

さて、あえて最初に個人的な話から筆を起こす、と書き出しておきながら、ほとんど個人的な話には触れず仕舞いである。そこで再び、その個人的な話から筆を起こすと、何を隠そう、かつて大学生と大学院生と、それから助手であった頃、15年以上にも亘って籍を置いていたのは「地域研究」や「地域文化」であったから、これは我ながらにノスタルジックである。なにしろ、それは今から、もう30年も40年も昔の、1970年代の中盤から1990年代の初頭に掛けての、この国の大学の話であり、これを日本の年号に直すと、それは昭和40年代の末年から平成の初年に当たるけれども、この時分の大学では現在の「地域研究」の盛況とは打って変わって、いまだ「地域研究」という領域が日本の大学に当たり前に存在する時代ではなかったし、このような「地域研究」や「地域文化」というネーミングも、それ自体が目新しい、新鮮なものに感じられていた時代であったからである。

盛況と言ったのは、例えば21世紀になって、日本で最初の「地域研究コンソーシアム」（JCAS：Japan Consortium for Area Studies）が発足したり、その事務局が京都大学の「地域研究統合情報センター」（CIAS：Center for

Integrated Area Studies）に置かれたりした事態を、この場では指し示しているが、このような全国規模の「地域研究」の団体が組織される気配など、いまだ当時の大学には微塵も感じられず、と言い出すと、いささか語弊はあるけれども、いくら贔屓目に見ても、そこで「地域研究」や「地域文化」という名の下に存在していたのは、それぞれ「日本文化」や「アジア文化」や、あるいは「ヨーロッパ文化」や「英米文化」や、はたまた「比較文化」と銘打った、それぞれがバラバラの、別々の「地域文化」や「地域研究」の講座であったに過ぎず、これらを取り纏め、一つの方向に舵を取る動きは、残念ながら、まるで雲を摑むかのごとき状態であった。

おまけに、このような講座に籍を置きながらも、その頃の学生の取得することの出来る学位（degree）は、学部であれば「教養」学士であったし、大学院であれば「国際学」修士であったから、そこには後年、学士（Bachelor）であれ、修士（Master）であれ、博士（Doctor）であれ、やがて宛がうことの許される「地域文化」（Area Culture）や「地域研究」（Area Studies）という呼称は、影も形も見出しえない頃の話である。したがって、そこには第三者の目から見ると、よく訳の分からない、奇妙な経歴（キャリア）を携えた、かなり胡散臭い肩書（タイトル）だけが独り歩きをしていたことになり、それが従来の、伝統的な就職口を探し回り、悪戦苦闘を繰り返していたこともなるのであるけれども、このようにして想い起こせば、結果的に「地域文化」出身の「教養」学士や、あるいは「地域研究」出身の「国際学」修士に糊口が叶ったのは、やはり幸運以外の何物でもない。

ただし、このような事態は「地域文化」であれ「地域研究」であれ、ある何かが、そこに新たに生まれ、育っていく上で、どうしても経なくてはならない、その過渡的な性格であり、かつ制約でもあったに違いないから、これを単に消極的（ネガティヴ）に、辻褄の合わない事態として悲観するよりも、むしろ逆に、その何かが、そこで引き受けるべき特権的な状況として捉え、これを積極的（ポジティヴ）に受け止める方が、より相応しくはなかったであろうか。と言ったのは、実は「地域文化」や「地域研究」や、何よりも、この双方に冠せられている「地域」という語と、いたって相性の好いのが「教養」という語であって、この繋がりは遡れば、そもそも「教養」という日本語が英語の culture や、あるいはドイツ語の Kultur の翻訳語（equivalent）として、私たちの前に姿を見せることになった経緯を振り返るだけでも、おそらく容易に察しの付く点であったからである。

ちなみに、ここで再び『日本国語大辞典』を引いて、その「教養」の語釈を紹介しておくと、そこには「学問、知識などによって養われた品位。教育、勉学などによって蓄えられた能力、知識。文化に関する広い知識」とあって、その典拠には阿部次郎（あべじろう）の『三太郎の日記』が挙げられているけれども、この語釈の末尾に置かれている「文化に関する広い知識」という件が、そのまま私たちの国の「教養」の成り立ちを暗示している。なお、このような「教養」の語法は、あくまで近代以降の用法であって、その由来も「大正時代以降か」と、この語の語誌に同辞典は記しているが、それに従うと、さしあたり「教養」という語が上記のような形で使われるようになってから、せいぜい一世紀が経過しているに過ぎず、それを直接、例示しているのが阿部次郎の『三太郎の日記』でもあれば、その「合本」が出版されるのは今から、ほぼ100年前の、大正7（1918）年のことでもあった。

阿部次郎の『三太郎の日記』については、後に再度、立ち返ることになるから、今は措く。が、このようにして「教養」の来歴を辿る時、この語が元来、英語の culture やドイツ語の Kultur の翻訳語として、私たちの前に姿を見せることになった経緯については、やはり見逃されてはならず、それを見逃したまま、ただ無闇矢鱈に「教養」の語を振り回すことほど愚かなことはない。事実、この語が現在、私たちが一方において、まるで意味の違う語のように見なしている「文化」と、さながら不即不離、表裏一体の関係にあることを踏まえれば、もともと「教養」とは私たちが、みずからの頭や体や心を、さながら農作業（agriculture）のようにして耕し、そこから様々な収穫物を手に入れるための、その営みに他ならないことは、ただちに納得の行く点であったろうし、その繋がりに即して言えば、このような「教養」と相性が好いのは、実は「地域」に他ならなかった訳である。

3

と書き継いで、これで話が収束し、終息するに至るのであれば、何とも結構なことではあるが、どうやら問屋が、そうは卸さないらしい。なぜなら、このようにして「教養」と「文化」とが一続きの語であること自体、世の多くの「教養人」や「文化人」には、まったく寝耳に水のようであるし、それが原因なのであろうか、むしろ「教養」や「文化」と相性が好いのは「地域」ではなく、その対語（antonym）の一つに宛がわれる、あの「国際」であるに違いない、と思い込んでいる節があるからである。そして、この「国際」と「教養」とを結び付

け、そこから「国際教養」という新語（neologism）まで案出され、この不思議な、いたって不可解な語が私たちの周囲を取り巻いている。それに比べれば、おそらく「地域教養」という語を目にし、耳にした途端、私たちの多くは困ったことに、そこに不審の念を催したり、怪訝な思いをも抱いたりせざるをえないのではあるまいか。

もっとも、さしあたり注意しておかなくてはならないのは、おそらく20世紀の末年までは、このような「国際教養」という語も「地域教養」という語も、その姿を見せてはおらず、したがって、その存在自体が無に等しいものでもありえた訳であって、例えば、このようにして「国際教養」とか「地域教養」とか、はなはだ面倒な、ややこしい言葉の遣り取りをしていること自体が、そもそも成立不能の事態であった可能性が高い。言い換えれば、この内の「国際教養」という語は、どうやら21世紀の初年あたりからであろう、この国では頻繁に、ひっきりなしに使われるようになってきた語であり、その市民権を現在、確実に手に入れているけれども、よく考えてみると、かなり如何わしい、正体不明の言い回しではなかったであろうか。なにしろ、と一気呵成に話を進めたい所ではあるが、それを急ぐと、この稿の大半は反故になる危険性が高いから、ここは我慢の、し所である。

それに比べれば、もう一方の「地域教養」という語が今でも、はるかに馴染みの薄い、認知度の低い言い回しに留まり続けていることは確かであろう。それどころか、この語を見たことも聞いたこともない、という向きも少なくないのかも知れないし、この言い回しが私たちには違和感のある、何か腑に落ちない面を備えていることも、つい先刻、述べておいた通りである。論より証拠、例えば上記の『日本国語大辞典』の語釈のように、そもそも「教養」には「文化に関する広い知識」という定義づけが、ごく当たり前に施されていたのでもあって、そこに反対に、ある種の狭い、閉じられたイメージを持つ「地域」という語を上乗せすれば、それが私たちには、しっくり来ないものに感じられても当然であろうし、そこから結果的に、私たちは「地域教養」という言い回しに対して、その「文化に関する広い知識」と矛盾するような、相反する思いを抱くことにもなるのであろう。

その点、あらためて確認しておくけれども、もともと「教養」という日本語は成立の当初から、どうやら私たち（すなわち、日本人）には幅の広い、奥行きのある、そこに何かしらの広がりや深みを抱え込んだものとして、捉えられ続けて

今に至るのが、この国の伝統的な、常識的な教養観であったらしい。このような日本人の教養観が、いったい何時、どのような形で生まれ、育ったものであるのかは、すでに『日本国語大辞典』の語釈や語誌を通じて、先刻来、紹介済みであるから、この場で細かく、この間の事情に立ち入るのは控えるが、念のため、このような日本人の教養観や、その歴史を扱った代表的な著作を挙げておくと、それは例えば、筒井清忠の『日本型「教養」の運命』（岩波書店、1995年）や、竹内洋の『日本の近代12：学歴貴族の栄光と挫折』（中央公論新社、1999年）や、あるいは、苅部直の『移りゆく「教養」』（NTT出版、2007年）といった辺りであろう。

いずれも日本人の教養観と、その歴史を跡づけるには、その名の通りの必読書であろうが、これらを踏まえつつ、ここで再度、確認しておくべき点があるとすれば、それは前述の通り、このようにして「教養」という名で呼ばれるに至った、この曖昧模糊な語が、ちょうど今から百年ばかりを遡る、大正時代の造語であり、しかも、それが新語であったことであろう。残念ながら、その造語主については、いまだ確かな目星を付けるには至らない模様であるけれども、少なくとも明治時代の初年に中村正直が、あの『西国立志編』の中で、この語を教育や養育の同義語として使っていた段階や、それ以前には、この語が死者の供養や祖先の仏事（すなわち、孝養）を指し示すために用いられていた事態と比べれば、この「教養」という語が産声を上げた折、どれほど華やかで、きらびやかな印象を与える語であったのかは、きっと百年後の私たちも、それ相応に想像は叶うはずである。

その意味において、いささか唐突ではあるが、このような百年前の日本人にとって、いかに「文化住宅」や「文化生活」が魅力に富むものであったのかを、ここで想い起こしておくのも無駄ではあるまい。と言うよりも、このようにして実は、いたって私たちの日常と密着し、通じ合い、通い合うものが「教養」なのであり、この点は当時、和風と洋風とを組み合わせた、まさしく和洋折衷の「文化住宅」が出現し、それまでの「洋館」に代わって、一躍、時代の象徴（シンボル）の役割を演じたことに、はっきり表現されている。そして、言ってみれば、それが「文化」と「教養」という双生児を産み出した、ほかならぬ大正時代の、もっとも著しい特徴であって、そこでは「文化住宅」に住み「文化生活」を営むことが、まさしく「教養」に他ならないし、そのような「教養」と「文化」との連携を主張し、そのことを通じて、一世を風靡したのが「大正モダニズム」でもあった。

もちろん、このようにして「文化」と「教養」とが絡み合う、ややこしい関係を、昨今の私たちであれば手っ取り早く、これを「カルチャー」という片仮名書きによって一括りにするであろうし、その方が、はるかに「モダニズム」の名に相応しいのでもあろうが、それは私たちが、この「教養」という語の生まれ、育った時点から、すでに百年後を生きていることの証でもあれば、それは翻って、かつて「教養」という語の誕生期や揺籃期に遭遇した、その頃の日本人の感慨や、それどころか感動など、ほとんど理解できない所で私たちが生きている、という事実の、これまた証なのではなかろうか。したがって、この「教養」という語に対して、現在、私たちが何か漠然とした、雲を摑むかのごとき思いを抱いているとすれば、それは多分に、この語の新鮮な姿が見失われてしまい、ほぼ忘れられてしまった時代に生きている、私たちに固有の反応でもあったに違いないのである。

事実、この「大正モダニズム」を先導する形で、あの西田幾多郎（にしだきたろう）の『善の研究』が出版されるに至るのは、もう大正時代を目前に控えた、明治44（1911）
◆16 年のことである。そして、そこから続いて、この日本初の本格的な哲学書と誉れの高い、きわめて難解な書物が当時の、何と高校生の愛読書となり、その名の通りの「教養書」の筆頭に置かれて、いわゆる「大正教養主義」（ひいては、昭和教養主義）の火付け役を果たすに至った点についても、よく知られた点であろう。また、そのための導火線の役割を演じた、倉田百三（くらたひゃくぞう）の『愛と認識との出発』は大正10（1921）年に発表されているし、これに戦前、と言うよりも、むしろ戦前と戦後とを跨いで、おそらく1970年代の中盤までは、どうにか細々とした命脈を保っていた「昭和教養主義」の、まさしく三幅対（triad）の一つ、阿部次郎の『三太郎の日記』が刊行され始めるのは、その間に挟まる、大正3（1914）年のことであった。

このようにして辿り直すと、この国の教養観や、その歴史に関して、一種の見取り図らしきものを描き出すことが出来るし、それは突き詰めれば、ある特定の世代の価値観に結び付きうるものでもあったことが、はっきりするであろう。例えば、先刻の西田幾多郎が明治3（1870）年に生まれて、亡くなったのは昭和20（1945）年であるのに対して、その著作（『善の研究』）に感動し、当時、第一高等学校の授業を放擲してまで、この本の著者の許を倉田百三が訪ねるのは、明治24（1891）年に生まれた彼の、満21歳の折の出来事である。ちなみに、こ

れより7年早く、明治16（1883）年に生まれ、同じように第一高等学校の生徒であった頃、漱石（そうせき）こと夏目金之助（なつめきんのすけ）に師事したのが阿部次郎であったけれども、この師弟関係も振り返れば、これまた漱石が慶應3（1867）年に生まれ、ちょうど西田幾多郎と同時期に帝国大学（文科大学）の学生であったことが浮かび上がってくる。

要するに、このようにして日本人の教養観や、その歴史は、まず江戸時代の末年か、明治時代の初頭に生を享けた世代（ジェネレーション）の、その固有の価値観に根差して始まり、やがて20歳前後を隔てて、今度は明治時代の末年に高校生や大学生となった世代によって引き継がれ、その実を結んでいったことになる。そして、それが本来の、この「教養」という語の誕生の時期でもあれば、そこから後年、この語は「大正教養主義」や「昭和教養主義」という名によって跡づけられうる、おおよそ100年ばかりの軌跡を描いたことにもなるであろう。その軌跡が、どうやら昨今、潰えそうな気配を漂わせていることも含めて、結果的に私たちが生きているのは、そのような日本の、それどころか世界の、大きな教養観や、その歴史の終着駅（ターミナル）でもあれば、それは同時に、そこから新しい何かがスタートを切るべき、その始発駅（ターミナル）でもありえたはずである。

ただし、そのような状況を介して、はたして私たちに明るい未来や、その展望が約束されているのかは、まったく予断を許さないけれども、少なくとも、これまで「大正教養主義」を間に置いて、おそらく「明治教養主義」と「昭和教養主義」と、それから「戦後教養主義」と、その名を呼んで呼べないことはない、四つの教養主義の後に、今や「平成教養主義」と称しても構わない、第五の教養主義の時代を、目下、私たちは迎えているのではあるまいか。事実、それは平成3（1991）年の、あの「大学設置基準の大綱化」を受けて、そこから大学を始めとする日本の高等教育機関において、かまびすしい教養談義の花が咲き、そこから更に、それが大学における教養教育の位置づけや、その役割についての問い掛けを産み出した事態に、はっきり指し示されており、その限りにおいて、すでに私たちの前には新しい、教養観の転換期が訪れていることは、まず疑いがないであろう。

が、それにも拘らず、この転換期は大学を始めとする日本の高等教育機関に、まさしく「教養教育ブーム」を齎し、その名の通りの呻き声（boom）を、それぞれの場所で発しさせはしたけれども、いかにも皮肉なことに、そのような呻吟

の間に到頭、日本の元号は平成から令和へと改まり、厳密に言えば、もう「平成教養主義」は終焉の時を迎えたことにもなり兼ねない有様である。しかも、その間に「平成教養主義」は主義として、みずからの教養観を打ち立て、その歴史を刻み出す前に、もっぱら「教養教育ブーム」の波に呑まれ、肝心の教養談義は、そっちのけの為体で、その趨勢は「長い物には巻かれろ」式の、きわめて現実的な、場当たり主義の教養教育の方法論や、その実践へと膝を屈してしまった感が強い。おそらく、この状況には当面、揺り戻しは利かないであろうが、それにも拘らず、それでは困る、と膝を正さざるをえないのが、ほかならぬ教養主義なのである。

5

その意味において、そもそも「教養」とは何であり、また、それが一方では「文化」と称される、お互いに不即不離、表裏一体の、あたかも一卵性双生児のごとき語と、どのように関わり、通じ合っているのかを、もう一度、私たちは問い質していく必要がある。なにしろ、この「文化」という語が元来、中国においては「武化」の対語であったことや、その用法が私たちの国にも引き継がれて、例えば江戸時代には15年間、この語が年号として使われていたことすら、私たちが改めて大学受験に備えるのではない限り、ほぼ頭の中からは、綺麗さっぱりと抜け落ちてしまっているのが実情であろうから。その点、いささか諄いようではあるが、ここで『日本国語大辞典』に三度の出御を願って、そもそも「文化」とは私たちが、と言うよりも、むしろ私たちを、さしあたり「権力や刑罰を用いないで導き教えること。文徳により教化すること」を意味していたことから話を続けたい。

すなわち、このようにして「文化」の「化」とは、まず何よりも「徳によって人民を善良に導くこと」であり、それが中国では呂不韋（りょふい）の編んだ『呂氏春秋』以降、ほぼ「感化」の同義語として使用されてきた語であったことを、とりあえず私たちは知っておく必要がある。さもないと、この「化」の上に「文」を乗せて、そこから「文化」という語が造られるに至った経緯についても、よく訳の分からないものになってしまうのが落ちであったろう。なお、ついでに『日本国語大辞典』で「化」の項を引くと、そこには語誌として以下の説明が添えられているので、ご参考までに。――「文化、教化、変化、造化」などは漢籍に見える中国の古典語だが、幕末・明治初期に「醇化、美化、悪化、緑化、強化、硬化、液化、気化」など「化」付きの新語が多く造られ、明治後期から大正にかけて

「化」の接尾語化が進み、「機械化、国有化、一般化、一元化」などの三字語を生み出した。

と、ここまで話が来れば、このようにして「化」を「名詞の下に付けて、そういう物、事、状態に変える、または、変わるという意を表わす」ために、まさしく「文化」という語が考案されるに至った点は、もはや贅言を要しないであろうし、そこから更に、それが端的に「世の中が開け進んで、生活内容が高まること」を表現するべく、いわゆる「文明開化」という言い回しが私たちの国において姿を見せ、これが明治時代になって、ほかならぬ「文化」の同義語として、一世を風靡するに及んだ点も縷説するまでもあるまい。要するに、このようにして「文化」には、そもそも何かを変えるとか、あるいは何かが変わるとか、そこに何らかの変化や変動が前提とされている訳であって、裏を返せば、そのような変化や変動が私たちの頭や体や心に、いっこうに刻み出されないのであれば、それは「文化」ではないし、この点は等しく、私たちの「教養」にも当て嵌まるはずである。

ところが、そのような能動性（activity）を持ったものとして、少なくとも、それを秘めたものとして、通常、私たちは「文化」や「教養」という語と向かい合い、これを受け止めているのであろうか。このように問い掛けてみれば、むしろ「文化」や「教養」が反対に、どこかしら私たちには受動性（passivity）と結び付く、ある種の受け身の姿勢を連想させることは否み難い。論より証拠、例えば昨今、私たちが最も自分の身近に「文化」や「教養」を感じているであろう、あの「文化の日」を間に挟んだ「読書週間」には、もっぱら私たちは図書館に通ったり、美術館に足を運んだりして、本を読むとか、絵画や彫刻や音楽を鑑賞するとか、要するに、さまざまな芸術と触れ合う機会を手に入れることこそが「文化」や「教養」である、という暗黙の了解があって、そこでは「文化」や「教養」が静かな、まるで頭や体や心を動かさない行為であるかのようにすら捉えられている。

もちろん、それは一方において、このような「文化」や「教養」と普段から、ごく当たり前に付き合っている側からすると、この類の「文化」や「教養」の理解は基本的に、根本的に間違っており、むしろ上記のごとき読書や芸術鑑賞が、いかに私たちの頭や体や心を動かし、これに揺さ振りを掛ける、はなはだエキサイティングな行為であるのかは、あまりにも自明であり、これを論ずるのが馬鹿馬鹿しいほどであろう。が、それは多分、自覚しているにせよ、いないにせよ、

この「文化」や「教養」の背後に、実は「武化」の対語としての働きや、あるいは「文明開化」の略語としての影響が、そこに潜み、畳み込まれていることを、暗に勘付いている側なのではなかろうか。なにしろ、もともと「文化の日」も遡れば、好むと好まざるとに拘らず、その由来は「文明開化」の象徴であった、明治天皇の誕生日を指し示す「天長節」や「明治節」に、他ならなかった訳であるから。

閑話休題。このようにして「文化」とは、そもそも何かを変えたり、何かが変わったりして、そこから私たちの頭や体や心に、さまざまな変化や変動の生じるのが、いちばん重要な要素であり、それを抜きにすれば、もっぱら「文化」は出来合いの、すでに出来上がったものを受容し、享受するだけの働きに成り下がってしまう虞がある。そして、その虞が困ったことに、きわめて著しい形で現実化をした時代に、どうやら私たちは生きているらしい。少なくとも、それが単なる疑心暗鬼ではない証拠に、この「文化」という語は本来、広く「自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによってつくり出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの」でありながら、それが忽ち「便利である、ハイカラ・モダンである、新式であるの意を表わす語」へと、いたって容易に堕落してしまったことを、さらに『日本国語大辞典』は跡づけている。

6

忽ち、という言い方をしたのでは、いささか語弊があり、短絡的に過ぎるので、この場で少しばかり補足を加えておくと、まず前掲の「文化」の語釈に対して、その典拠に『日本国語大辞典』は西周の『百学連環』を挙げているから、この語が明治時代の初頭には、すでに先刻のような意味合いを持つ語として使われ出していたことは確かであろう。すなわち、繰り返しにはなるけれども、そこでは「文化」が「自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによってつくり出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの」として捉えられ、その生産性や向上性や、それどころか、さらに創造性までをも伴って、使われ出していたことになる。が、その後に同辞典の語誌には、この語が英語の civilization の翻訳語に宛がわれ、いわゆる「文明」と共に、ほとんど、この語と同じような形で用いられた時期の介在していたことが述べられている。

しかも、その内の「文明」の方が、まず「文明開化」という言い回しの流行に伴い、一般化をしたのに対して、もう一つの「文化」の方は、これを後から追うようにして、やがて明治20年前後に普及し、定着するに至った模様である。と言うことは、この時期までの「文化」とは、今の私たちが「文明」という語によって、あれやこれやイメージしているものと、それほど違わないものであったことになる訳であり、それを再び『日本国語大辞典』の「文明」の語釈を借りて、ここで紹介しておくと、そもそも「文明」とは「文教が盛んで人知が明らかになり、精神的・物質的に生活が快適である状態」を意味しているのであるけれども、一つだけ注意しておきたいのは、この後に続けて、さらに同辞典が次のように記していることである。――「特に、宗教・道徳・学問・芸術などの精神的な文化に対して、技術・機械の発達や社会制度の整備などによる経済的・物質的文化をさす」。

やれやれ、このようにして辞書を引き出すと、あたかも私たちは言葉の海に、どんどん舟を漕ぎ出すことにならざるをえないし、それ以外の言葉との付き合いは、どのような手段も方法も、私たちには許されていないのであろうが、さしあたり簡単な交通整理だけは済ませておくと、このようにして「文化」であれ「文明」であれ、私たちは当初、英語の civilization の翻訳語として、この二つの語を併用していた時期があり、この時期に限っては、ほとんど主役を務めていたのは「文明」の方であって、もっぱら「文化」の方は脇役に過ぎなかった訳である。そして、それが端的に、明治時代の「文明」と「文化」との位置づけに他ならず、この状況が変わらず、それ以降も続いていたのであれば、ひょっとすると「文化」は「文明」の脇役から、とうとう端役にまで身を持ち崩し、下手をすると、この語が今のような姿で生き残ることなど、ありえない事態であったのかも知れない。

と言うことは、このような事態が変化し、例えば先刻の『日本国語大辞典』の言い回しのごとく、さながら「文化」が「文明」よりも優れた、これに勝ったものであるかのような表現が成り立ち、この双方の立場が逆転するに至る経緯が、私たちには訪れる必要があったことにならざるをえない。と書き継いだら、その転換期が「文化」との繋がりにおいて、これまで本稿で論じてきた「教養」という語の登場と重なり合っていることは、もはや力説するには及ばないであろうし、その事態を『日本国語大辞典』は以下のように簡潔に纏めているので、ご参照を願いたい。――「明治三〇年代後半になると、ドイツ哲学が日本社会に浸透し始め、それに伴い「文化」はドイツ語の Kultur（英語の culture）の訳語へと転

じた。それによって、次第に「文化」と「文明」の違いが強調されるようになった。大正時代には、「文化」が多用され、「文明」の意味をも包括することとなった」。

さて、いかがであろう。このようにして「文化」は英語の civilization の翻訳語から、やがてドイツ語の Kultur の翻訳語へと身を翻し、しかも、それが英語の culture とは一線を画しながら、もう一方においては「教養」という名の、新しい時代のモードをも身に纏うことになった次第。そして、そのような文化運動の渦中から、これまた「教養」の原語の一つともなった、ドイツ語の Bildung が姿を見せ、そこに「大正教養主義」が産み出されることになるのであるけれども、ここで少しばかり細かい補足を加えておくと、例えば井上哲次郎(いのうえてつじろう)を中心にして、私たちの国の最初の哲学辞典（『哲学字彙』）の「英獨佛和」版が、ちょうど明治から大正への改元の年（すなわち、1912年）に編まれた際も、いまだ Bildung にも Kultur にも、また culture にも、まったく「教養」の語は宛がわれていないから、この語の登場は完全に、大正時代を俟たねばならなかった点が浮き彫りになる。

◆22 ちなみに、そのような「教養」の登場を証し立てるものとして、上記のごとく『日本国語大辞典』は、あの阿部次郎の『三太郎の日記』を挙げていたのであるが、この本の初篇が刊行された時、大正3（1914）年に阿部次郎は、いまだ30歳の若さに過ぎなかったことも、この「教養」という語の誕生と重ね合わせて、私たちは記憶に留めておく必要がある。なぜなら、このようにして「大正教養主義」が当時の、まさしく若者運動でもありえたことが、そもそも「教養」の理解には不可欠であったからであり、それは等しく私たちの国に、例えば新渡戸稲造(にとべいなぞう)や内村鑑三(うちむらかんぞう)や、あるいは柳田國男(やなぎたくにお)によって唱えられた、いわゆる「地人」や「地文」や「地方」を対象とする学問が、その産声を上げる時期とも通じ合っていたのであり、その繋がりを顧みるだけでも、ふたたび「地域」と「教養」との相性の好さは歴然としている。なお、上記の「地方」は「ぢかた」と読むので、念のため。

7

もっとも、このようにして「地域」と「教養」との相性の好さが、それ相応に認められはしても、それでは肝心の、その「地域」のことを、どこまで私たちが理解しているのかは怪しい話であって、昨今、これほど「地域」という語が身の

回りに溢れているにも拘らず、その意味する所が、いたって私たちには不分明であり、その正体すら、よく分からないものでもありえたのではなかろうか。論より証拠、今度は試しに『広辞苑』（岩波書店、2016年）で「地域」を引くと、そこには「区切られた土地。土地の区域」という語釈が置かれ、その後には、この語と繋がる20ほどの言い回しが次のように並べられているのであるから驚きである。地域医療、地域開発、地域気象観測システム、地域協議会、地域漁業管理機関、地域自治区、地域社会、地域社会学校、地域性、地域政党、地域代表制、地域団体、地域暖房、地域地区、地域通貨、地域手当、地域闘争、地域福祉、地域冷暖房。

いやはや、このようにして振り返ってみると、いかに私たちが「地域」まみれの生活を送り、営んでいるのかに、あらためて愕然とし、茫然とし、慄然とせざるをえないが、それにしても、このような多くの、数限りない言い回しの中に顔を覗かせる「地域」に対して、そもそも私たちは、どのようなイメージを抱いているのであろう。もちろん、その際の「地域」が字面の通りに、そのまま「区切られた土地。土地の区域」という意味を持っていることは、誰しも頷かざるをえないであろうし、例えば『日本国語大辞典』にも、ほとんど同じ「土地の区域。区画された、ある範囲の土地」という語釈が置かれ、その典拠には箕作阮甫（訳）の『玉石志林』が挙げられているから、どうやら江戸時代の末年に至ると、この「地域」という語を日本人が使っていたことになるし、さらに遡れば、この語が古く、中国の『周礼』に淵源を有する語であったことも同辞典は教えてくれている。

とは言っても、このようにして「地域」という語を解きほぐし、それが「土地の区域」を指し示すものであることは分かっても、それでは一体、それが何によって「区切られた土地」であり、また、それが何によって「区画された、ある範囲の土地」であるのかは、それほど明瞭ではない。なぜなら、そこには大きく別ければ、例えば山や谷や、あるいは川や海によって隔てられ、限られた「地域」が存在しているし、これを今、仮に自然的地域と呼んでおけば、もう一方には人間の、いわゆる衣・食・住を始めとして、さまざまな生活形態によって浮かび上がる、それぞれの文化的地域が存在することも疑いがないからである。その意味において、まず「地域」とは私たちが、このような自然（nature）と文化（culture）との両面において、そこに産み出し、現在へと引き継いだ、はなはだ多様な土地の区切り方であり、その区画の内容である、と定義づけておくのが第一歩であろう。

第一歩であろう、と言ったのは、そこから続けて第二歩が、たちまちスタートを切らざるをえないからである。すなわち、このようにして「地域」とは、当面、私たちにとっては空間的なものであり、そうであるからこそ、それは「地域」と名づけられているのでもあるが、よく考えてみると、それと並んで「地域」は、当然ながら時間的なものでもあって、例えば上記の自然的地域が、いくら変化に乏しく、さしあたり変動の少ないものではあっても、例えば山が噴火をしたり、川が氾濫をしたりすれば、たちまち「地域」は恒常的な、その身を覆すに至る訳であり、しかも、そのような「地域」を昨今、私たちは人為的に、いくらでも山を削ったり、川を埋めたりして、その区切り方を違えたり、区画を改めたりすることなど、お茶の子であり、それは鴨長明（かものちょうめい）の『方丈記』の言い回しを借りるまでもなく、きわめて「無常」な時の流れを、私たちの目に晒しているのが実情である。

また、これに対して文化的地域の方も、そこに歴史上、人や物が決まった形で、衣服にせよ、食事にせよ、住居にせよ、いつも一定の様式を保ちうるのは、むしろ例外的な現象であり、ある種の幻想でもあって、それぞれの場所で人や物は、お互いに移動したり、交流したり、混淆したりを繰り返しながら、そもそも変化し続けてきたのが「地域」であろうし、とりわけ、その動きが急速に、急激に加速した時代（すなわち、近代）の社会や、その仕組の中で、私たちが翻弄され、振り回されるかのようにして生きていることも、この場で揚言するには及ぶまい。しかも、このような動きは決して今に始まったことではなく、それは近代以前の、中世においても古代においても、それぞれ程度差はあれ、延々と織り成されてきた「地域」の実像であるに違いなく、その脈絡を踏まえて言えば、私たちは常に、その時々の「地域」の解体の波に洗われつつ、今、この時を生きている次第。

したがって、そもそも「地域」には固有の、独自の様式があり、あらかじめ確定されているのではなく、それは例えば、衣服におけるモード（mode）であっても、食事におけるマナー（manner）であっても、住居におけるスタイル（style）であっても、これらの様式は詰まる所、言ってみれば、それぞれが猪と豚とを交配し、掛け合わせた、その名の通りのハイブリッド（hybrid）なものであって、このような雑種の、いわゆる猪豚（いのぶた）の姿こそが、そもそも「地域」の正常な、ごく普通の形なのではあるまいか。ところが、それにも拘らず、これらの雑種の様式を、私たちは歴史上、往々にして、あたかも反対の、きわめて純粋なものであるかのように思い込み、そこに単一で、さらに同質の

「地域」を夢想してきたことも事実であり、そのこと自体が最も、この「地域」という語には似つかわしくないものであることも、この場で真摯に、私たちは自戒する必要がある。

8

さて、このようにして捉え直すと、結果的に私たちが「地域」という語と向かい合う折に、いちばん気を付けなくてはならないのは、そこに雑種の、まさしくハイブリッドな頭の使い方や、あるいは身の処し方を、そもそも私たちが出来ているのかどうか、という点に辿り着く。その意味において、と言うべきか、その意味に反して、と言うべきか、もともと私たちが一般に、ごく普通に日本語で「地域」と名づけているものには、上記の箕作阮甫の事例からも窺える通り、その背後には中国語は疎か、幾つかの外国語（foreign language）が潜んでいることも、この場で再度、私たちは振り返っておくべきであろう。なにしろ、そのような「地域」に通じる語の主だったものを、いたって大雑把に英語で拾い集めるだけでも、そこには area とか region とか zone とか、かなり内容を異にする「地域」が姿を見せることになるからであり、おそらく昨今の私たちであれば、そこに community や locality という語を結び付ける方が、はるかに親密度は増すであろう。

ともあれ、これらの語によって指し示される、はなはだ多義的な、複合的な「地域」のことを、私たちは揃って、同じ「地域」という日本語で呼んでいるのであり、それは裏を返せば、そこに相当、違った意味合いの「地域」が含まれており、その微妙なニュアンス（nuance）次第では、随分、陰影や濃淡を異にする「地域」の捉え方が存在していることにもなるであろうし、そこから更に、これらの捉え方の差から産み出される、さまざまな「地域学」や「地域研究」が存在している、と言うことにもならざるをえないであろう。もちろん、このような事態は20世紀の末年以降、例えば大谷晃一（おおたにこういち）の唱えた「大阪学」を始めとして、さまざまな都市名を冠した「地域学」や、それらを包み込む、それぞれ県別の「地域学」や、あるいは九州から四国から中国から、さすがに中国学とは名乗れないにしても、より広い、地方単位の「地域学」も、ごく普通に私たちの周囲には存在している。

それどころか、今や日本の大学の授業科目には、国立も公立も私立も含めて、その名の通りの「地域学」や「地域研究」が花盛りであって、そこには花どころ

か、文字どおりに星の数ほどの夥しい「地域学」や「地域研究」が、ひしめき合っている。当然、和歌山大学も例外ではない。が、その際の「地域学」や「地域研究」が、はたして英語に置き換えれば、どのような「地域」を対象とするものであるのかは、それほど自明ではないし、例えば和歌山大学に限って言っても、それが area であるのか region であるのか、はたまた community であるのかは、おそらく担当教員の意識次第で、てんでん、ばらばらの状態なのではなかろうか。おまけに、それは漢字の「和歌山」であったり、平仮名の「わかやま」であったり、場合によっては「紀州」であったり「熊野」であったり、いっこうに収束の付かない、下手をすると、烏合の衆の集まりに堕し兼ねないから困った話である。

また、その先に姿を見せるのが、もっと大きな、例えば日本海や太平洋や、あるいはアジアやアフリカや、このような海や大陸をも相手とし、対象とする、はなはだ広範囲の、包括的な「地域学」や「地域研究」であって、ここまで来ると、もはや「地域」の金看板を掲げている学問や研究に出会したら、その際には早速、眉に唾でも付けて、古めかしいおまじないの一つをも、するに越したことはないのかも知れないし、それを一概に俗信と決め付けて、これを非難したり、馬鹿にしたりすることは出来ないような気もしてくるから、これは何とも、さらに困った話である。とは言っても、そこで私たちが単純に、これらの「地域学」や「地域研究」の、いずれかの立場を選び、その内容や方法を限定することが叶うのであれば、それは至極、有り難い話ではあろうが、残念ながら、そのような取捨選択をするほどの自由も、その裁量も、私たちには許されていないのが実情である。

と、このようにして振り返ると、おそらく「地域」という語ほど昨今の、私たちにとっての手枷や足枷はなく、それゆえ、それは私たちにとっての最大の難物でもありえたのであるけれども、意外や意外、それは見方を変えれば、これまで本稿が論じてきたような、実は百年前の、この国の置かれていた状況と通じ合う面をも兼ね備えていたのであって、そこでは「地域」や、その「地域」と結び付いた「文化」や「教養」から、新しい社会変革の風が立ち、それが一種の若者運動の形をも取って、あの「時代閉塞の現状」（石川啄木（いしかわたくぼく））を打ち破るような、束の間の息吹を醸し出していた頃でもあった訳である。そして、それを『日本国語大辞典』は前述の通り、広く「自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによってつくり出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの」と位置づけ、きわめて高らかに、その人間的価値を称揚し

ていた次第。

とは言っても、そのような「文化」や「教養」が百年前には、いとも容易に身を持ち崩し、それが単に「便利である、ハイカラ・モダンである、新式であるの意を表わす語」へと堕落してしまったことも、これまた『日本国語大辞典』は指摘していたのであり、そこに私たちが、当時の「世界戦争」（World War）や「世界恐慌」（World Depression）や、これらの破局（カタストロフ）を並べ立て、そのことで暗に言い逃れをすることが許されうるのかは、むしろ百年後の私たちにこそ、問い掛けられている問題であったのではなかろうか。その点、何とも因果なことに、ふたたび私たちに突き付けられているのは、その「文化」や「教養」が本当に、そもそも「地域」と相性の好いものであるのかどうか、それとも、それは過去の話に過ぎず、もはや現在の、ましてや未来の、私たちには通用しない話であるのかどうか、要するに、それは文字どおりの正念場の問い掛けなのである。